

助成番号：483

第91回アメリカ酪農科学会での研究発表並びに ネブラスカ大学での研究打合せ

鈴木 三 義

畜産管理学科家畜育種増殖学助教授

1. 目 的

第91回アメリカ酪農科学会での研究発表並びにネブラスカ大学での研究打合せのため

2. 期 間

平成8年7月12日～平成8年8月1日

3. 場 所

アメリカ合衆国 オレゴン州コーバリス市
ネブラスカ州リンカーン市

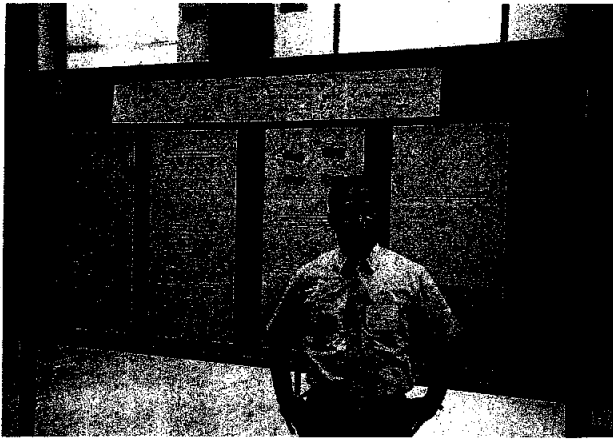
4. 内 容

1) 会場のこと

米国酪農科学会学会の第91回大会は、平成8年7月14日～平成8年7月17日の日程でコーバリス市にあるオレゴン州立大学で行われた。アメリカでの学会は中西部の畜産・酪農学会（1993年3月29～31日アイオワ州デモイン）について2度目であったので、学会の雰囲気は知っていた。その時の印象は、こちらの学会は畜産の本場だけあり、活発に行われている感じがしていた。しかし、今度は酪農科学だけの学会ではあるが、全国的な大会（世界中から集まる）なのでかなり規模が大きかった。大会のあったコーバリス市は、日本からの直行便があるオレゴン州最大の都市ポートランドから車で約1時間半の所にあり、人口は45,000人の中で学生が14,000人であるのでアメリカの典型的な片田舎の学園都市と言う雰囲気である。大学は125年の歴史があるそうで、落ち着いた感じの所であった。緯度的には北海道の北部に位置し、車の窓からみた木々も針葉樹が多く北海道に似た



歓迎の幕



ポスター会場にて

感じを受けた。学会の初日の方はかなり暑く、学会受付の時に聞かれたことも北海道より暑いかと言うことであった。私は生憎コーバリスに宿を確保できずに隣の車で20分程の所にあるアルバニーから通うことになったが、味の素の研究所に勤めている人はさらに遠い所しか宿が取れなかったそうである。

2) 発表のこと

関連の分科会は Dairy Cattle Improvement (乳牛の改良)で、①2日目の午前8時から正午までが泌乳形質についての発表、②午後は分子

遺伝や非相加的遺伝について、③3日目の午後がポスター発表、④4日目の午前中が生産寿命形質に関する発表という内容であった。

①での主な話題は、乳牛検定における検定日データの分析を扱ったものが多く、また、農務省の研究者が10題の中で3題を占めていた。最近のコンピュータの発達は、従来の1乳期を集計した後の分析ではなく、検定日毎のデータを活用することを可能にした。このことからよりきめ細かな情報を得ることができるという観点からの研究である。その他、種雄牛の国際評価に関するものが2題あった。

②の主なテーマは、QTLに関するものが9題中3題で最も多く、遺伝子に関するもの2題などである。ここでの課題の多くは、特定の遺伝子を同定することより、むしろ統計遺伝学的手法を用いて判明した遺伝子の情報を活用して改良に結び付けて行くかを扱っていたように思う。

③はポスターで特定のテーマと言うよりは雑多な事柄で、後代検定に関する問題やBLAD遺伝子に関するもの、血液成分の育種への応用などがあった。私どもは、“日本のホルスタインの乳成分量とその対数変換に対する反復率モデルを用いた多形質制限最尤法による遺伝的パラメータの推定”という題で発表した。ポスターは午後の間掲示しておくが、最後の2時間は質問に答えるという形式で行われた。色々な人と議論できたが、私の知っている人では、農務省のNorman, Wiggans, VanRaden, Van Tassellの各博士やジョージア大学のMisztal先生、オランダのNRSのDe Jong博士らは記憶に新しい。終わりの方でポスターを外してかけていたら、日本人が4人訪ねてきて、最後は日本語での会話が弾んだ。2人は味の素の関係の人で、1人はミシガン大学のマスターに在籍中の学生、あと1人は偶然にも畜大の獣医を卒業し、しかも十勝農協連に勤務している人(アメリカの大学で研修中)だった。分野が異なるので専門の話というよりは、それぞれの紹介が主な話題であった。

④最後は、また口頭発表で体型と寿命や生涯生産に関する話題であった。この日は雨降りで時間がかかってしまい最初の方の発表は聞くことができなかった。

全体的印象として、議論が活発なことである。若い人も年寄りも(カナダのBurnside先生やIowaのFreeman先生など)議論好きに見えた。

今回の学会は私にとって大変貴重な経験だった。日本の学会であれば、乳牛の育種に関する演題はせいぜい3~4題あればよい方でこの大会では約10年分の勉強をしたことになる。このような機会を与えて下さった財団法人帯広畜産大学後援会には心から感謝する。